

わたしのゆめ

わたしのおおきくなったら、かわいいキャバジューになる

作・大橋 秀和

一之瀬愛美

児童の母親。

徳永玲子

児童の母親。

近藤弘子

児童の母親。

田頭亮子

児童の母親。

奥村芳江

児童の母親。

仙波晋

児童の父親。

鈴木美智雄

朝峰小学校教頭。

日比野遼平

朝峰小学校教師。

御手洗しのぶ

朝峰小学校教師。

山田美樹

教員志望の大学生。

【注】／は、セリフが次の人物のセリフによって中断させられるという意味で用いる

朝峰（あさみね） 小学校の会議室。

児童減少で使われなくなった教室が会議室として利用されている。そのため、部屋の隅には学校机、椅子が積み重ねられている。

中央には客席に向かって大きな黒板が立っている。

それを挟むように、上手下手それぞれに学校机が連なって配置されている。

十一月の土曜日の午後。

窓の外からはスポーツに興じる子供たちの歓声が聞こえる。

教室では、児童の親たちが、児童から集めたアンケートの束に目を通してている。

仙波
（手にしたアンケートをめくりながら）『うでのきんにくが、ふとかった。』

田頭
（同様に）『いたをけずって、ビニールみたいに、ぺらぺらにしたのが、すごいとおもいました。』

仙波
（同様に）『ほんだなが、あつというまにできて、びっくりしました。』
やめてください。

近藤
すごい人気じゃないですか。
そんな、たいしたあれじゃ。

田頭
だってほら、（アンケートを指しながら）『だいくになりたい』ってとこ、みんな丸つけてるし。

徳永
ウチの子もね、最近、消しゴムでこう（手の動きを真似する）『カンナ』とかやってて。

仙波
あゝウチもウチも。（同様に真似しながら）土屋カンナ！って。
・・・

仙波
このカンナ、あかんなあ。・・・あ、カンナさん（旦那さん）、元気？
よくまあ次々。

田頭
・・・それでね、こうなったら、来月も旦那さん／
カンナさん！？

田頭
カン・・・（仙波に）もうっ、（近藤に）旦那さんにもう一回お願いできないかと思っ
つて。

徳永
連続で、つてこれまでなかったけど、こんなに人気だから。
本当、勘弁してください。

近藤
いいじゃないですか。ほら、最近の子は、コンピューターとかゲームとか、ばっ
かでしょ？やっぱ、手を動かして物をつくる経験が、すごく大事だと思うん
です。

近藤
ほら来月は、あの、美容師の・・・誰でしたっけ？仙波さんのお知り合いにお願い
するって／

仙波 断られました。

近藤 え。

仙波 近藤さんとこの後だと、霞んじやうからって。

近藤 え、そんなこと／

田頭 仙波さん。

仙波 ハハ、いや、授業なんて無理って言われちゃって。

徳永 私の方で当たってた人たちも、みんなスケジュールが合わないみたいで・・・だから正直、近藤さんところにもう1回やってもらえると本当に助かるんです。

近藤 はあ。

徳永 もしよかったら、旦那さんをお願いしてもらえませんか？

近藤 そうですね、話はしてみますけど・・・。

仙波 なかなかみんな、協力してくれないですよ。

徳永 課外授業自体はね、みんな、いいねって言ってくれるんですよ。小学生のうちからいろんな職業の人の話を聞いて、職業意識？を高めましょう、っていう。

田頭 でも、じゃあ講師をお願いしますって言ったら／

仙波 『時間がないんで』か、『話すことがないんで』。

徳永 そんな難しく考えなくてもねえ。

田頭 そうそう、ちよつと木が切れるぐらいで、子供は喜ぶのに。

近藤 え。

徳永 あとね、いろんな方とお話ししましたけど、何ていうんでしょう、子育ては学校任せって意識の方が多いですよ。

田頭 せっかくこうやって、ボランティアとして学校の活動に参加できる仕組みができたのに。

徳永 『やりたい人がやればいいんじゃないですか』って。

仙波 そんなこと言われたんですか？

徳永 直接そう言われたわけじゃないですけど・・・ほら、そういう感じって伝わってくるじゃないですか。

田頭 あ、分かります。

徳永 仕事が忙しいのは分かりますけど、自分の子供の事なのに、気にならないんですよかね。田頭さんなんか正社員で働いて、家庭もあって、それでもやってるわけだし、仙波さんも／

田頭 あ、仙波さんがやればいいじゃないですか。

仙波 え？

田頭 課外授業、やってくださいよ。

徳永 そうですよ。こんな身近にいい人がいたのに。

仙波 待ってください。私、近藤さんとこみたいにな、何かできるってわけじゃないし・・・え何、超高速なレジの打ち方、とかやればいいんですか？

徳永 コンビニって子供たちにも身近な存在ですから。裏側ではどんな苦労があるか、とか。

仙波 いや、でも、ウチの子だって、バイトと私のやってること、区別ついてないくらい

なんで。

徳永 それこそ、お父さんの仕事を知ってもらう、いいチャンスじゃないですか。

田頭 そーですよ。勇人くんも、お父さんのこと、自慢できるんじゃないですか？

仙波 ……あの、本当、人前で話すとか無理なんで、勘弁してください。

田頭 えー何それ、さっきは人のこと、さんざん文句言ってたくせに。(アンケートの束を手に取る)ほら、近藤さんとこが羨ましくはないんですか？(アンケートを読み上げる)『チェンソーやばい。』…ハハ…ほら、『かっこよかった』…『じょうぎをつかわずに、まっすぐきれるのがすごかった』…『としをとってから、つぶしがきかなくなる』？ん？

近藤 ……。

田頭 ……何なんですかね、これ。

仙波 年取ったら、力仕事できなくなる…ってことですかね。

田頭 そんなことないですよね、ほら、年とともに、技術も上がっていく訳だし。

近藤 ま、でも、その通りですよ。もうあの年であちこちガタがきてますから。将来どうなるか…。

徳永 嫌ですよね。こういうのって、きっと親が言ってるんですよ。

田頭 そうそう、『つぶしがきく』とか、子供が使う言葉じゃないですよ。『あーいう仕事は年取った時に困るんだから、あなたはちゃんと勉強なさい』とかね、言ってるですよきつと。

仙波 ……あの、大丈夫ですか？

近藤 え。

仙波 いや、分からないですけど。こーいう変なこと言う子がいたら…例えばですけど、近藤さんのお子さんが…なんていうか、からかわれるっていうか、その…。

田頭 大丈夫ですよ。(アンケートを示して)圧倒的多数で人気者なんですから。

仙波 そうなんですけど、ほら、子供の集団って、ちよつとしたことでこう、空気が変わっちゃうじゃないですか。

田頭 考えすぎですよ。

近藤 あの、ウチの子、ニブいんで、その、多少周りからあれしたって大丈夫ですよ。

徳永 でもね、もし、そんなイジメ？みたいなことにならなかったとしてもですよ、こういう職業に対する偏見？をなくしていくよう、私たちから、ちゃんと教えていかなきゃいけないですよね。

近藤 ……あの、そんな大げさにしなくても、本当、気にしてないんで。

徳永 本当は、こういうことは、先生にしっかり指導してもらいたいですけどね。

田頭 近藤さんの…さくらちゃんって、御手洗先生のところですよね…。

近藤 ええ。

仙波 御手洗先生、真面目でいいじゃないですか。

徳永 うーん、真面目なのはいいんですけど、ちよつと硬すぎるっていうか…。ほら、

仙波 この間も、忘れ物が多いからって放課後1時間も学級会やったって。

徳永 あゝそれ聞きました。塾がある子もいたのに、勉強なんかより大事なことがあるだろうって、全員居残ら

田頭 せたらしくて。親御さんからクレームがあつて大変だったみたいですよ。
 田頭 頑張ってるのは、分かるんですけどね……。
 徳永 こんなこと言うの酷かもしれないですけど、あれじゃ、子供たちは付いてかないですよね。もうちよつと余裕っていうか、子供目線で話せるような……包容力が無いと……。

田頭 ウチも下の子が御手洗先生なんですけど、なんかちよつと、軽く見ちゃってるような感じで……何て呼ばれてるか知ってます？すぐヒステリー起こすから、『ヒ生子』って……ねえ、どうしたら……。
 仙波 こっちの活動も手伝ってくれるし、本当、いい人なんですけどね……。

美樹が段ボール箱いっぱい卒業文集を抱えて入ってくる。

美樹 なんですか？

徳永 ……いや、美樹ちゃんのことじゃないから。

仙波 それ(卒業文集の束を指して) どうしたの？

美樹 あ、なんか資料室がパソコン部屋になるらしくて、あそこの荷物全部こっちに運んじゃうんですって。

仙波 何、昔の卒業文集？

近藤 全部残してるんですかね。

田頭 あ、じゃ、私が書いたのあるかも。

徳永 あれ、この卒業生？

田頭 え、前この話したじゃないですか。ほら、私が1年生の時の、4年生で、(仙波を指して)3年生ですよ？小学校の時に会ってたかもって盛り上がったじゃないですか。

徳永 ああ、そうだった。ごめんなさい。

仙波 ミキティ、教育実習、決まったんだって？

美樹 あ、ええ、結局、母校に行くことになって……なんで、来月は実家に帰らせて頂きますので、こっちはお休みします。記念式もあつて忙しい時期に、ご迷惑をお掛けします。

徳永 愛媛だっけ？いいよ、ゆっくりしてらっしゃい。

田頭 そうそう、大学も忙しいのに、こっちのボランティアやつて、ミニバスの指導までしてくれてんだから、たまには休まないよ。

近藤 本当、倒れちゃうんじゃないかって、いつも心配してるのよ。

美樹 や、でも、全部好きでやつてることなんで、全然平気ですよ。

仙波 いーねえ。もう、先生やるために生まれてきたようなんじゃない。

美樹 そんなじゃないですよ。

田頭 だって、ウチの子なんて美樹ちゃんの大ファンなのよ。先生になったら、ウチの子担任してやってよ。

美樹 麗羅ちゃんその前に卒業しちゃうじゃないですか。

田頭 大丈夫、それまで留年して待たせとくから。

美樹 ハハハ・・・でも、そう言って頂けるのは嬉しいんですけど、ぶっちゃけ私、先生やるの向いてないかもって、一時期、悩んでたんです。

仙波 お、青春だね。

美樹 でも、ちょうどそのタイミングでここの学生ボランティア募集を見つけて、これに掛けてみようかなって。

近藤 それで、悩みは解決したの。

美樹 ・・・・正直まだよく分からないんですけど、みなさんとここの活動やってみて、手応えみたいな感じることができたんで、取りあえずはこのままもうちょっと頑張ってみようって思ってます。

田頭 何言ってるの。美樹ちゃんにびったりの仕事じゃない。

近藤 なんかいいですね。目標持って頑張ってる・・・私が学生の時なんて、本当、何も考えてなくて、なんか、恥ずかしくなってきた。

徳永 最近の子はみんな真面目ですよ、ほら、就職活動が厳しいから、みんな早くからいろいろ考えてて・・・。

美樹 田頭さんもそうなんじゃないですか？

田頭 え。

美樹 だって子育てしながら仕事続けるって大変じゃないですか。何か目標とか、こうなりたいたとか、あるんじゃないんですか？

田頭 私はただ惰性で続けてるだけです。そんな、大した仕事でもないし。

近藤 そんなことないですよ。なんか、難しそうなことされてるんですよ。えーと、会計士？でしたっけ。

田頭 資格とか持つてる訳じゃないんで、ただのお手伝いですよ。

仙波 それじゃ、次の課外事業は田頭さんにやってもらおうってことで。

徳永 ダメですよ、次は仙波さん、やってもらいますから。

盛り上がっているところに、教師たち（日比野、鈴木、御手洗）が入ってくる。

日比野 どうもすみません、遅くなっちゃいました。

田頭 いいんですよ。おしゃべりしながら待ってました。それに・・・奥村さんも遅刻してますし。

日比野 あ（部屋のメンバーを見て奥村がいないことを確かめる）・・・ま、いつものことですか。

徳永 またいつ来るか分からないんで、始めちゃいませんか。

日比野 あ・・・そうですね。それでは。

一同、多少の無駄口は挟みつつも、少しだけかしまって席につく。

日比野 えーと、じゃ、朝峰小地域・保護者ネットワークの役員会をはじめます。（手元の書類を見ながら）まず・・・先に、来月の職業体験の課外授業なんです・・・。

田頭 仙波さんが話してくれるそうですよ。

仙波 あ、いや・・・(教師たちに向かって) 何でもないのでから。

御手洗 あの、それなんですけど・・・。

日比野 あ・・・えーと。(日比野は御手洗を制するものの、どうしていいか迷い、教師3

人がしばし無言で視線を交わす。)

鈴木 ……それでは、私から、お話しします。

保護者たちは教師たちの様子がややおかしいことに気づき、
神妙な面持ちで鈴木に注目する。

鈴木 (やや苦笑いしながらも神妙な面持ちで) え・・・次回の課外授業のゲストにどのような職業の方をお呼びするか、ということですが・・・。実は先日、御手洗先生のクラスで、児童たちに、呼んでほしい職業の人をアンケート調査する、ということをやりました・・・。

保護者たちは全員、御手洗を見る。

御手洗 子供たちの意見も、尊重すべきだと思ひまして。

鈴木 ……申し訳ありません。我々の方のコミュニケーションミスでして・・・児童たちは本当はどんな話が聞きたいんだろう、なんてことをちよつと話してはいたんですが・・・。

徳永 良いことじゃないですか、子供たちの意見を聞くのは。

鈴木 それは・・・そうなんです、児童たちのアンケートを集計してみたところ、ですね。一位になったのは・・・キャバ嬢・・・ということでした・・・。

徳永 キャバジョー？

鈴木 キャバクラ・・・つまり、若い女性がマンツーマンで会話をしながらお酒をサービ
スする・・・。

徳永 分かりますよ、それくらい。・・・え？本当に子供たちがそう書いたんですか。

鈴木 ……ええ、二位に10票も差をつけて、断トツの一位でした。

日比野 ……最近、キャバクラの女性を主人公にしたドラマと・・・あと、マンガが人気
になってまして・・・。まあ、小学生向けのものではないですが、見る子は見ます
から。それで、どうやら一部の女子の間で流行っていたらしく・・・。

鈴木 ある出版社の方で行った調査では、中学生女子のなりたい職業ランキングで、キャ
バ嬢が9位になったとか・・・。まあ、時代と言いますかなんといいますが・・・
この不況ですし、親御さんが水商売をされている児童も、少なからずおりまして、
あまり抵抗感なく、普通の職業のつもりで・・・書いたんでしょうね。

しばらく間。

徳永 ……それで、どうするんですか？まさか本当に、キャバ嬢を呼んだりは・・・し
ないですよ？

鈴木 それはもう・・・仮にも、まだ判断力のついていない若いお子さんを預かる教育機関として・・・水商売の話をするというのは、到底、実施すべきことではないと認識しております。ただ・・・。

徳永 なんですか。

鈴木 御手洗先生の方から・・・子供たちがこのようにはつきりと意見表明した以上、それをまったく無視してしまうのは問題なのではないかという・・・その、問題提起がありました。

徳永 は？・・・え、じゃ、その・・・キャバ嬢を呼ぶんですか。

鈴木 そうは申ししておりません。あくまで学校としては、風紀を守るということが、第一に優先されるべきだと考えております・・・ただ、我々の間で何度も議論を重ねましたが・・・どうしても結論が出ず、ひとつの案として、保護者の皆様の意見も頂戴する・・・ということになった訳でして・・・。

田頭 それは・・・学校の問題じゃないですか。教頭先生が御手洗先生を説得できなかったっていう・・・。

御手洗 学校だけの問題ではありません。まず第一に、子供たちの問題ですので、ぜひ御さんも交えてお話しさせて頂きたいと、私が希望しました。

しばらく間。

徳永 あの・・・それじゃ、御手洗先生は、キャバクラの女性を、呼ぶべきだと、お考えなんですか？

御手洗 分かりません。

徳永 ？

御手洗 それを、話し合いたいです。

徳永 ……あの、常識的に考えて、小学生に、水商売の人の話を聞かせるのは問題だと・・・思いませんか。

御手洗 ……はい、それは、そう思います。

徳永 じゃあ何で・・・。

御手洗 私たちの世代の常識と、子供たちの常識は違いますから・・・子供たちは、彼女たちなりの価値観で、純粹にキャバ嬢に憧れを持つてるんです。それを全否定してしまうことは、決して子供たちのためにならないと・・・。

田頭 あの、よく分からないんですけど、先生はいったいどうしたいんですか？子供たちの将来にとって、一番、良いと思える結論を出したいんです。

田頭 そんなの決まってるじゃないですか。そりゃ、いつかはちゃんと教えるべき時期は来ると思います。でも今はまだ、まだ世の中の良いことも悪いことも判断できない年齢なんです・・・。(周囲を見回しながら) そんな時期にねえ、そんな、キャバクラを普通の仕事みたいに紹介してしまつたら・・・それこそ、変な価値観を持つちゃいますよねえ。(順に周囲の保護者の同意を促し、最後に美樹を見る)

美樹 あの・・・キャバ嬢ってそんなにまずいですか。

田頭 え。

美樹 私もキャバクラでバイトしてますが、別に、普通のバイトと変わらないと思います。

全員、啞然とする。

田頭 え、美樹ちゃん、キャバクラで働いてるの。

美樹 あ・・・はい。

田頭 あの・・・何で。

美樹 何でって、普通のバイトですよ。

田頭 だってほら・・・男の人にサービスしたりとかするんじゃないの？

美樹 サービスって・・・普通に話すだけですよ。

田頭 でもさ、何ていうの、ほら、触られたりとか。

美樹 風俗じゃないんで。

田頭 え〜でも、酔ったら、そういうことされちゃうこともあるんじゃないの？

美樹 う〜ん。たまくにそういうお客さんもいますけど、それは、男の人はみんなそうじゃないですか。ほら、仙波さんみたいなもんですよ。

仙波 え。

田頭 仙波さん。

仙波 ちよつと、待って、え？

徳永 どういうことですか。

仙波 え？え？何？美樹ちゃん、俺、そんなこと・・・。

美樹 あー違いますって。そーいうセクハラみたいなじゃなくて、ふつーに仲良くなるよ、こーう、触れたりするじゃないですか。

徳永 確かに、仙波さん、ちよつと美樹ちゃんに対して慣れ慣れしすぎるんじゃないかって思っていました。

仙波 ストップ！ストップ！なんか、話がずれてないですか？え？美樹ちゃん、俺、そんなセクハラみたいなこと・・・。

美樹 だから、違いますって。仙波さんは普通ですよ。そりゃ、胸とか触られたりは嫌ですけど、普通にちよつとこーう、スキンシップとかは、しますよね？

徳永 あのね、美樹ちゃん。美樹ちゃんは何とも思わないかもしれないけど、そういう時、男のひとは下心を持って・・・。

仙波 違います。違いますって。だから・・・ほら、美樹ちゃんぐらいになるともう、俺の年からすると子供なわけじゃない？だから、ほら、子供とじやれるみたいな感覚で・・・。

徳永 ロリコンってことですか。

仙波 ・・・・待って。ちよつと、落ち着いてください。俺は全然、そういういやらしい気持ちはないし、美樹ちゃんも別にそれが普通だと思ってた。ほら、何の問題もないじゃないですか。

徳永 それは美樹ちゃんの純粋な気持ちに付け込んでるんです。普通の女性はそういうのを不愉快に感じるんです。

仙波 でも、美樹ちゃんはそんなことないって。

徳永 私は、不快でした。

仙波 ……。

徳永 よりによって小学校で、ひと回りも年が離れた子相手に、ミキティ、ミキティって…。

仙波 ……今までそんなこと、ひとことも言わなかったじゃないですか。

徳永 言えませんが、そんなこと。恥ずかしい。

日比野 あの…ちよつと、待つてください。…徳永さん、お気持ちは分かりますが、ちよつと話がずれちよつとるんで、整理しましょうか…。あの、取りあえず、仙波さんの件はですね、ま、美樹ちゃんは気にしてなかったけど、あまり一般的に良い行動ではなかった…、そうですね。

仙波 ……まあ、そうですね。

日比野 徳永さん、あの、仙波さんも悪気があった訳じゃないみたいだし、そこは信じてあげましょうよ。

徳永 ……。

仙波 ……。

日比野 あの、ま、仙波さんも、中にはこう、徳永さんのように、その…気にされる方もいるっていうことを、その、配慮して頂いて…ま、今後は、気をつける、ってことで。

仙波 ……先生。

日比野 え。

仙波 あの…私も小学生じゃないんで、そういう、収め方は納得いかないですよ。

日比野 仙波さん。

仙波 あの…なんか、私が一方的に悪いみたいなことになってますけど…ま、確かに、徳永さんには不愉快な思いをさせたのかもしれないですけど…その見方も、ちよつと偏ってるんじゃないですかね。

徳永 え？

仙波 そりゃ、男性としては、若い女の人と仲良くしたいと思う時はありますよ。ま、多少はいやらしい気持ちも生まれますよ。でも、それって全然普通のことじゃないですかね？

日比野 仙波さん…あの、お気持ちは分かりますけど、いったん話を戻しましょうか。取りあえず今は、来月の課外授業の…。

仙波 同じことですよ。…要は、女性が男性を接待することが、良いか悪いかってことでしょ？違いますか。

日比野 いや、それはちよつと話が…。

仙波 先生だって、キャバクラ行きますよね。

日比野 いや…私は行きませんけど。

仙波 先生、正直にいきましょうよ。先生だって、キャバクラ一度くらい、行ったことあるでしょ？

日比野 ……まあ、学生の時に…二、三度は…。

徳永 先生。

日比野 今は、まあ、さすがに……。

仙波 本当ですか？隠れてこっそり行ってるんじゃないですか？

田頭 ちよつと仙波さん、先生に向かって……。

仙波 いや、いいじゃないですか、健全な男性なら普通ですつて。何にもおかしいことないですから。

田頭 仙波さんちよつと。

仙波 (近藤に) どうですか？旦那さん、キャバクラとか、行ったりしないですか？

近藤 へ？

日比野 あの、話が変わる方向に……。

仙波 たまに……気晴らしに、行ったりしますよね？

近藤 そうですね……たまに……あの、付き合いとかで？行ったりしてるみたいですが。

仙波 ほら、子供たちに大人気の、腕利き大工の近藤さんの旦那さんも、立派な家を建てるためには、たまにはキャバクラで息を抜く必要があるんですよ。いいじゃないですか、キャバクラ、大事な仕事じゃないですか。(御手洗に向かって) 先生。

御手洗 はい？

仙波 俺、賛成します。キャバ嬢、呼びましょう。子供たちに話を聞かせてあげましょうよ。

日比野 仙波さん。

田頭 落ち着いてくださいよ……そんな、意地にならなくていいじゃないですか？

仙波 そんなことないですよ、私は冷静ですよ。キャバクラも大事な仕事だから、ちゃんと子供たちにその意義を伝える……。全然、間違っていないじゃないですか。

全員、どうして良いか分からず黙る。

奥村が入ってくる。

奥村 すみませーん。遅くなりました。

日比野 あ……いえ。

間。

奥村 あの、ちゃんと時間に間に合うように入るつもりだったんですけど、パート先の店長が……。

日比野 あ……はい。

奥村 何？どうしたんですか。

日比野 仙波さん、とにかく、いったん話を戻しましょうよ。仙波さんの件は、また落ち着いて話し合っ……。

徳永 ちよつと外にでも出て、頭冷やしてきた方がいいんじゃないですか。

日比野 徳永さん。

仙波 え、先生、私、出た方がいいですか。

奥村 ねえ、何なの、この空気。

日比野 仙波さんも、お願いですから、いったん落ち着けてください。

奥村 何なんですか、ちゃんと説明してくださいよ。(仙波の方に動こうとする日比野の腕を持つ)

日比野 (奥村を思わず強く払いのけてしまう) ちょっと黙って。

奥村 ……。

日比野 ……すみません。

鈴木 ……あの、取りあえず、座りませんか？

全員席に着く。

少し気まずい間。

鈴木 ……あの、遅れていらっしやった奥村さんのために、改めて説明しますと……。

先日、御手洗先生のクラスで、来月の課外授業に呼んで欲しい職業についてアンケート調査を行いました……。

奥村 ああ、キャバ嬢。笑えるよねよね。

鈴木 あ……ご存じでしたか。

奥村 ウチの子も入れたらいいんで。というか、アイツら分かってないですよね。ただ綺麗な服を着てちやほやされる仕事だと思ってるし。そんな楽な仕事じゃないって言い聞かせとききましたから。

鈴木 ……あの、すみません……失礼ながら、あの、奥村さんも、ご自身がその、キャバクラのようなどころで……何て言うんでしょう……お仕事をされたりとか……。

奥村 え、私？ハハ……私がそんなこと、できるわけじゃないですか！なんですか、先生、セクハラですよ。

鈴木 そうですか。済みません変なことを聞いてしまつて。

奥村 あれ？もしかして、さっき話してたのって、キャバ嬢を呼ぶかどうかってこと？

鈴木 ……まあ、そうですね。

奥村 え、ちよつと、マジですか？何、そんなことで熱くなつてんですか。

徳永 ……。

仙波 ……。

日比野 まあ、あの、それ以外にもいろいろありまして……。

御手洗 あの、奥村さんはどう思われますか？

奥村 え。

御手洗 小学校で、キャバクラの話を聞かせていいと思いますか？

奥村 何、本当に、真面目な顔してそんなこと議論するんですか。

御手洗 ……子供たちなりに、自分たちの意思を表明したわけですから、きちんとそれに向き合わなきゃいけないと思うんです。

奥村 はあ。そうですね……まあ、学校でやるのはまずいっちゃまずいと思いますけど、

でも子供たちが呼びたいって言うてんですよ。一之瀬さんも張り切ってるし、まあ、辺り障りのない範囲で？話してもらってもいいんじゃないですか。

日比野 どういうことですか。

奥村 ん？どうしました？

日比野 張り切ってるって・・・？

御手洗 一之瀬七海ちゃん・・・私のクラスですけど、その七海ちゃんのお母さんが、現在、キャバクラで働かれています。それで、今回のアンケートの話聞いて、ぜひ話をしたいとおっしゃってますよ。

鈴木 御手洗先生、聞いてないですよ。

御手洗 私も詳しいことは聞いていません。今日、いらっしゃることになっているので、この場でお話を・・・。

日比野 え、ちよつと待つてください。その・・・一之瀬さんのお母さんが、ここにいらっしゃるんですか？

御手洗 ええ。

鈴木 御手洗先生、そういうことはちゃんと事前に言ってもらわないと・・・。

御手洗 何か問題でしたか。

鈴木 問題というか、そういうことじゃなくて・・・。

御手洗 一之瀬さんも保護者の一員ですからこの場にいらっしゃってもおかしくないですし、そもそもキャバ嬢の話をするんですから、実際にキャバ嬢の方がいらっしゃった方がちゃんとした議論ができると思います。

鈴木と日比野は保護者たちに聞かれないよう、小声で御手洗に詰め寄る。

仙波 もうここに一人いましたけどね。

奥村 何？美樹ちゃん、キャバクラで働いてんの。

美樹 え、ああ、はい。

奥村 えゝ意外ゝ。あ、でも分かるかも。美樹ちゃんきつと売れると思うわ。

美樹 そんなことないですよ。

鈴木 あの、すみません、みなさん・・・大変申し訳ありませんが、本日の会議はいったん解散、とさせていただきます。

日比野 先生。

鈴木 申し訳ありません。我々の、その、コミュニケーションミスで、いろいろと行き違いがあったようですので、もう一度、いろいろ整理した上で、改めて皆さんにご意見を伺うという・・・。

御手洗 先生、でも、一之瀬さんもいらっしゃることですし・・・。

鈴木 一之瀬さんのお母さんには、まずは私がお話を伺います。その上で・・・。

徳永 いいんじゃないですか。

鈴木 ？

徳永 せっかくキャバクラで働いてる方がいらっしゃるんですから、みんなで話を聞きましょう。それで、一緒にどうするか話し合いませんか。

鈴木 徳永さん……。

徳永 どうでしょう。みなさん、そうしませんか？

田頭 あ、はい。

仙波 私は、いいですよ。

徳永 先生？

日比野 （鈴木の方を伺って）では……あの、いろいろ脱線しましたが、引き続き会議を進めていきたいと思えます。

仙波 あの、先生。

日比野 はい。

仙波 今の時点での、みなさんの意見を伺いたいですけど。

日比野 え。

仙波 今のところ呼ぶのに賛成なのは、私と、御手洗先生と……。

御手洗 私は別に賛成しているわけではありません。

仙波 え、じゃあ反対ですか。

御手洗 分かりません。ちゃんと議論した上で結論を出したいだけです。

仙波 ……じゃ、一応、保留、ということでもいいですね。で、美樹ちゃんは？

美樹 え。

仙波 美樹ちゃんはどう思う？

美樹 ……すみません。よく分かりません。なんか私、あんまり分かってなかったみたいです。

仙波 ……じゃ、保留2と。あとは……。

奥村 じゃ、私、賛成で。

徳永 あの……本気なんですか。

奥村 ええ。

田頭 小学四年生に、水商売の話ですよ。

奥村 まあ、ちよつと早い気はするけど、一之瀬さんなら、そんな変なことにならないですよ。

仙波 一之瀬さんを、ご存じなんですか？

奥村 ウチの子と仲いいんで、七海ちゃん、よく遊びに来るんですよ。たまくに夜も預かったりして、ほら、バツイチ仲間同士？助け合わないと。私みたいに実家に寄生してない分、大変そうなんです。

田頭 それは……苦労されてるかもしれないし、良い方なのかもしれないですけど、子供たちに話をするっていうのは別の話ですよね。

仙波 あの〜とりあえず、全員の意見を聞きませんか？

田頭 ……いいですけど。

仙波 じゃあ、賛成2ということ、他の方は全員反対ですか？

徳永 ええ。

田頭 反対です。

近藤 あ、私も……反対です。

日比野 （仙波の視線を受けて）あ、私ですか……そうですね、仙波さんのお気持ちちは分

かりますが、やはり子供たちにする話とは思えません。
反対4・・・あの先生、反対派の人に、理由を聞きたいんですけど。
田頭　なんか仙波さん、楽しそうじゃないですか。
仙波　そんなことないですよ、私は真面目です。
日比野　そうですね・・・それじゃ、どなたか反対の理由を。

お互いに譲り合う間。

仙波　近藤さん、どうですか。
近藤　え。

徳永　どうして近藤さんなんですか。

仙波　どうしてって、さっきから近藤さんの意見だけ伺ってないな、と思ひまして。
徳永　・・・そうですね。

仙波　近藤さん、反対なんですよ？何ですか？

近藤　え、えーと・・・
仙波　どうしました？

近藤　すみません、急にそんな、理由とか言われると、ちょっと出て来なくて。
仙波　でも、理由があるから反対してるんですよ。

田頭　仙波さん。そんな言い方止めてください。

仙波　普通に質問してるだけですけど。
田頭　さっきから何なんですか。
仙波　何って別に。

近藤　すみません、あの、私がちゃんと発言しないから。

日比野　いいですよ、近藤さん。後で伺いますから。

近藤　いえ、いいです・・・あの、言います・・・えーと、やはり子供には早すぎると
思います。

仙波　じゃあ、いくつだったらいんですか？

近藤　それは分からないですけど・・・でも、小学生は、そういうことを教えるには、ま
だ早いと思います。

仙波　でもその小学生が、キャバ嬢ってアンケートに書いたわけですよ。だからこそ逆
に、ちゃんとしたことを教えないとまづくないですか？ほっとくと変なイメージに
惑わされちゃうんじゃないですか？

近藤　それは・・・。

仙波　そう思いませんか？

徳永　仙波さん。

仙波　何ですか？

徳永　そんな言い方は酷いと思います。

仙波　待ってください。私は普通に聞いているだけですって。

徳永　何なんですか。さっきの仕返しですか？近藤さんがちょっと大人しいからって・・・。

奥村　仙波さんって結構Sですよね。

仙波 待つてくださいよ。え、また私が責められるパターンですか？
 近藤 すみません、あの、ちゃんと答えられない私が悪いんで……。
 田頭 近藤さんは悪くないですよ。この人が……。
 仙波 ……あの、いいですか？みなさん落ち着いてください。私はただ……。ほら、さ
 田頭 旦那さんの息抜きのためにもああいう場所は必要っていう……。
 仙波 そんなわけないじゃないですか。じゃ近藤さんはどうなるんです。自分の旦那がそ
 田頭 なんかところによって、平気な訳ないですけど。
 仙波 まあ、それはそうかもしれないですけど。
 田頭 けどじゃないですよ。そりや、男の人は楽しいかもしれませんが、奥さんの気持ち
 はどうなんです。
 ……。
 仙波 あの、仙波さんがキャバクラに行くってこと、奥さまはご存じなんですか。
 徳永 ええ、まあ、うちはオープンなんで。
 仙波 それについて何もおっしゃらないんですか。
 仙波 まあ、たまに行く分には。
 徳永 本当は悲しい思いをされてるんじゃないですか？
 仙波 大げさですよ。たかがキャバクラですよ。
 徳永 止めて欲しいのに言えないでいるじゃないんですか。
 仙波 いや、ウチのはそんなじゃないんで。
 徳永 近藤さん。
 近藤 はい。
 徳永 本当はどう思ってるんじゃないんですか。
 近藤 え。
 徳永 本当は、旦那さんに、そういうお店に行ってもらいたくないですよね？
 近藤 いや、そんな、改めて聞かれると……。
 徳永 いいんですよ。本当のことをおっしゃってください。
 近藤 ……そうですね……。今更そんな、もうこの年なんで、そんな、色々思ったりと
 かはないですけど……。
 徳永 ええ。
 近藤 ……まあ、できれば……。行かないでいてくれるといいなとは思いますが。
 田頭 そうですよ、分かります。
 徳永 旦那さんと話し合われたりはしないんですか。
 近藤 そんな、今更そんな話するあれでもないですし。
 徳永 何言ってるんです。そうやって大事なことを言えないでいるから、夫婦の間に溝が
 できてしまうんですよ。
 近藤 はあ。
 徳永 もし言いにくいようでしたら、私からお話ししてもいいですよ。
 近藤 え、いや、それは……。
 徳永 遠慮しないでください。やっぱりこういう時は助け合わないと。

近藤 …… 本当、そんなんじゃないですから。大丈夫です。…… あの、付き合いとかもありますから、仕方ない面もありますし。

徳永 近藤さん。

近藤 …… それに、飲みに行かずに帰ってもね、家にいるのが私みたいなんじゃないや、嫌になりますよね。…… せっかく1日頑張って仕事したのに、申し訳ないっていうか、そりゃ、若くて可愛い子の方と遊んだ方が、明日も頑張ろうってなりますよ。……

淡々と話す近藤の姿に、全員しばらく口を挟めず黙る。

美樹 …… あの。やっぱりキャバクラってよくないですよね。

仙波 え。

美樹 すみません。今まであんまりちゃんと考えずに、その、バイトしてたんですけど。

さつきから話聞いてて、やっぱりよくないことだったのかなって。……

仙波 いやそれは話が。……

徳永 そうね、少なくとも、先生を指さうって言う人が、いる場所じゃないよね。

美樹 あの、すみません。…… えと、何に謝ってるのか分からないんですけど、なんか、すごく申し訳ない気持ちになって。……

近藤 ごめんなさい。私が変わなこと言っちゃったから。あの、美樹ちゃんが悪いってことじゃないから。その、気にしないで。

田頭 そうそう、これでひとつ勉強したってことで、ね。

徳永 日比野先生。

日比野 あ、はい。

徳永 結論が出たんじゃないでしょうか。

日比野 あ、えくと。……

徳永 ちゃんと教えるべきだっていう仙波さんのご意見も分かりますけど、学校で授業としてやるからには、子供たちの目標になる生き方を伝えるべきだと思っんです。近藤さんみたいに、悲しい思いをされている女性がいる以上。……

仙波 また話がずれてないですか。

女性陣からの冷たい視線が仙波に注がれる。

仙波 …… あ、いや、やっぱいいです。また患者にされそうだし。

日比野 仙波さん、よろしいですか。

仙波 いいですよ。別にどっちでも。

日比野 (仙波を気にしながら) えくと、どうでしょう。…… えと、あと賛成だったのは…… (奥村を見る)。

奥村 うーん、それを言われると、反論できないな。…… だけど近藤さん、本気の浮気に比べたら、可愛いもんだよ。キャバクラは、所詮、商売だからさ。

日比野 それじゃ、賛成のお二人も納得したということ。…… えと保留の美樹ちゃんも反

対ってことですよね。．．．御手洗先生、皆さん反対だということなので、やはり今回は．．．。

一之瀬が入ってくる。

少し間。

日比野 あ．．．一之瀬さんの、お母さんですか。

一之瀬 ごめんなさい。遅くなってしまつて。(御手洗に気づいて) あ、先生、どうも。(全員に向かつて) 一之瀬です。よろしくお願いします。(奥村に) あ、よかったー、知らない人ばっかだと思つた。

奥村 ちよと、来るんだつたら言つてよー。びっくりした。

一之瀬 だつて知らなかつたもん。こーいうのつて、もつと真面目な人がやつてるのかと思つて。

奥村 おいおい！

鈴木 教頭の鈴木です。

一之瀬 あ、はい。お世話になってます。

鈴木 えーと、あの、私どももさつき話を聞いたばかりでよく事情を把握していないんですが．．．一之瀬さんは．．．その、現在、キャバクラにお勤めだとか。

一之瀬 あ、はい。

鈴木 あ、いや、別に失礼な意味ではなく．．．あまり、そんな方には見えないなあと。

一之瀬 そうですか？あ、たくさん盛ってるアゲアゲの子の方がよかつたですか？

鈴木 いえ、そういう訳では．．．えーと、それで、ですね。一之瀬さんが、ぜひ来月の課外授業でお話をされたいと、その、希望されていると伺つたのですが．．．。

一之瀬 希望してゐるつていうか．．．ウチの子が。

鈴木 え。

一之瀬 ウチの子がね、来て欲しいつて言つたんですよ．．．私もね、人前で話するなんてできないつて言つたんですけど。なんか珍しく意地になつちやつて。

鈴木 えつ、それじゃ、話をするつて言つているのはお子さんの方で．．．。

一之瀬 なんかね、友達に約束しちやつたみたいなんですよ。

鈴木 はあ．．．。

一之瀬 今、流行つてんですよ？ドラマが。それでなんか、自慢したくなつちやつたみたい．．．私ね、本当は心配してたんですよ。片親で、水商売の娘だから、もしかしたら苛められたりしたらどうしようつて。

鈴木 いえ、そんなことは。

一之瀬 考えすぎですかね。でも、苛めまでいかなくてもね、ほら、心の中では嫌がつてたりするんじゃないかなつて．．．だから、学校に来て欲しい、クラスの友達に会つて欲しいつて言つてくれて、私本当に嬉しかつたんですよ．．．話とか、まだ何すればいいか分かつてないんですけどね？というか、私ができるかどうかも分からないけど？せっかくだから、頑張つてみようかなつて思つて。

鈴木
・・・

しばらく間。

奥村
・・・何、この空気。
一之瀬
？

奥村
ごめんね。なんかさつき、一之瀬さんに話をしてもらうのは止めようってことにな
って。

一之瀬
そうなの？

鈴木
えくと・・・。

日比野
いや、その、まだ決まったっていうわけでは・・・。

奥村
あれ？そーですよね？（田頭を見る）

田頭
・・・あの、一之瀬さん。一之瀬さんのお気持ちは、同じ親として、すごく分かり
ます。・・・だから、本当に申し訳ないんですけど・・・。（助けを求めるように徳
永を見る）

徳永
そうですね、先ほど、こちらで話し合いました・・・。そういう結論に・・・ええ。

一之瀬
え、どういうことですか？

徳永
・・・ですから・・・何て言えばいいんでしょう・・・ほら、そういったお店があ
ることです・・・中には、中には、ですよ、家庭とか夫婦の間で、気にされる方もい
なくはないと・・・近藤さんとかもおっしゃいまして・・・。

近藤
え。

一之瀬
（近藤に向かって）あの、よく分からないんですけど。

近藤
え・・・いや、あの。

奥村
要は、旦那をキャバ嬢に取られんのはムカつくってことですよ。

近藤
・・・そんな風にはつきり言われてしまうと、あれですけど。

一之瀬
それは・・・すみませんでした。

近藤
いや、そんな、こちらこそ・・・。

一之瀬
いえ、何かご迷惑をお掛けして・・・。

奥村
え、何に謝ってんの？

徳永
・・・それでね、一之瀬さんがどうってわけじゃないんですけど、そういったこと
を気にされる方もいらっしやるっていうのは・・・それは分かりますよね。

一之瀬
ええ。

徳永
だから、学校で話をしてもらうっていうのは、今回は遠慮してもらおうってことにな
ったんです。

一之瀬
でも、私も、子供と約束しちゃったんです。

徳永
・・・。

一之瀬
それは、大事じゃないですか。

徳永
それは・・・こういう言い方しちゃって申し訳ないですけど、一之瀬さんが勝手に
やったことですよね。

一之瀬
・・・。

徳永 一之瀬さんがお子さんとの約束を大事にされるのは、素晴らしいことだと思いますけど、学校でやることは他のお子さんのことも考えてあげないと・・・。

一之瀬 でも、他のお子さん也希望したから、アンケートで一位になったんですよ。

徳永 それは子供の考えることですから。そんな真面目に聞かなくても。

一之瀬 ・・・・。

御手洗 あの、それは違うと思います。

日比野 先生。

御手洗 あの、さつきからお話伺っていて、どうしても納得できないことがあるんですけど・・・。

日比野 御手洗先生。今日はまず、みなさんの意見を伺うっていうことで・・・。

御手洗 そうなんですけど、これだけは言わせてください。・・・あの、もう少し、子供たちの気持ちも考えてあげて欲しいんです。

徳永 ・・・・。

御手洗 子供には早いとか、子供の考えることだとか、おっしゃってましたけど、子供たちって、びつくりするくらい、いろんなことを分かっているんです。浮気とか？離婚とか？男女の話にしても、そうです。TVのドラマでやるのはそんなことばかりですし、最近では、離婚とか、両親が男女の問題を抱えていらっしやる子も多いですから・・・。あの子たちは、そんな大人の世界を分かった上で、敢えてキャバ嬢っていう存在に興味を持って、話を聞きたいという意思を表明したんです。そこにはちゃんと向き合わなきゃいけないと思うんです。

一之瀬 先生、そうです。その通りですよ。

奥村 確かにあいつら相当マセてますよね。

徳永 ・・・・先生、先生。お気持ちは分かりますけど、それは理想です。大人の世界を分かっているって言うてもまだ10歳ですよ？表面的なイメージでしか考えられない子供なんです。

仙波 だからこそ、この機会に、ちゃんと教えてあげる必要があるんじゃないですか？

奥村 あれ、仙波さん復活？

仙波 別に私は意見変えたつもりないですけど。

奥村 じゃ、やっぱ私もこっちの味方かな。一之瀬さん応援します。

一之瀬 え？あ、ありがとう。

田頭 奥村さん。

奥村 さつきの話聞いて意見変わったんで。いいでしょ？

日比野 ちよつと待ってください。・・・えくと、それじゃ、引き続き議論を続ける、ということ、ですかね？

田頭 みなさん本気ですか？本気で子供たちに、そんな話を聞かせていいと思ってるんですか？

奥村 いいんじゃないですか。

田頭 自分の子供ですよ、もつと真面目に考えてください。そんな話聞いて、もし変な風になっちゃうたらどうするんです？

一之瀬 変な風ってどういうことですか。

田頭 それは・・・非行とか？性的に、そのふしだらになったりとか・・・。
一之瀬 私、そんな話しませんよ。

奥村 それはちよつと酷くないですか。

田頭 ……一之瀬さんに、そんなつもりはなくても、子供はいろんなものに、変な風に影響受けちゃいますから・・・まだ判断力もない、不安定な存在なんです。私たち大人が、ちゃんと守ってあげなきゃ駄目なんですよ。

仙波 そうやって甘やかしてたら、自分じゃ何にも考えられない子になっちゃうんじゃないですか？

御手洗 田頭さん。お子さんをもう少し信じてあげてもいいんじゃないですか。ほら、

麗羅ちゃんだって、本当に考え方もしっかりしてて・・・。

田頭 先生、本当にウチの子のこと、分かっただけじゃありませんか。

御手洗 はい。毎日、ちゃんとお話しをして・・・。

田頭 生まれた時からずっと見てるんです。ウチの子のことは私が一番わかっています。

御手洗 確かにそうだと思います。でも、子供たちには、家庭では見せない、学校だけの顔もあるんです。

鈴木 先生。

田頭 そんな理屈・・・。あの、ウチの子なんです。私が一番分かっているんです。先生そんな、綺麗ごとで・・・もし何かあったら責任取れるんですか。

徳永 田頭さん。

鈴木 あの、すみせん。御手洗も少し感情的になってしまったようで・・・まだ若くてその、ちよつと熱くなってしまふところがありまして・・・。

田頭 ……いえ、大丈夫です。すみません。

鈴木 御手洗先生。まあ、席に戻りましょうか。(御手洗を席に戻そうとする)

田頭 ……先生。先生が子供たちになんて言われているかご存知ですか。

仙波 田頭さん。

御手洗 どういうことですか。

鈴木 先生、ほら。(足を止めた御手洗を促す)

田頭 ……いえ、何でもありません。すみません。

しばらく間。

日比野 えーと、どうしましょうか・・・。

一之瀬 あのさつきから、私が話す子供がダメになるみたいと言われてるんですけど。

田頭 そうは言ってますけど。

一之瀬 え、でも、お子さんが心配なんですよね。

田頭 ……あくまで可能性の問題です。

一之瀬 よく分からないんですけど。

徳永 派手な化粧、男の視線を意識した服装、お酒、たばこ、夜の繁華街・・・そういうものに憧れるようになる、困るんです。

仙波 何ですか？大工さんの真似は OK でキャバ嬢の真似は駄目ってことですか？そ

れって職業差別じゃないですか？

徳永 職業じゃなくて、あくまで児童たちの生活態度の問題です。

日比野 あの、あくまで一般論として、ですが、そういった夜のお仕事に憧れたり、恰好を真似したり・・・そういった子は、非行に走りやすい傾向がありますので。何て言うんでしよう、生活指導という面から、あまり好ましくないかと。

仙波 同じことですよ。学校としては、大工を目指すことは認めるけど、キャバクラで働くことは認めないってことでしょ。

日比野 そうは言ってもません。

仙波 アンケート一位なのに呼ばなかったら、そう言ってるようなもんですよ。

日比野 それは・・・。

一之瀬 あの、もしこれで駄目だったことになる、ウチの子どうなるんですか？

日比野 え。

一之瀬 苛められたりしないですか？

日比野 いえ、そんなことは決して。

一之瀬 絶対ないとは言いませんよ。

仙波 そりゃそうですよ、だって学校自ら差別しちゃうわけですから。

日比野 ですから差別というわけではなく・・・。

田頭 苛められても仕方ないんじゃないですか？

一之瀬 ・・・・どういふことですか？

田頭 ・・・・あの、もう、よく分からないんですけど・・・一之瀬さんのお子さんが苛められないために、ウチの子が風俗の話を聞かなきゃいけないっていうことなんですか。それって変じゃないですか。

一之瀬 ちよつと！風俗なんかじゃないですよ。

田頭 似たようなもんじゃないですか。あのね、ウチの子は真面目なんです。そんな、男の人相手のサービスの話なんかして、ウチの子の人生めちゃくちゃにしないでください。

奥村 それちよつと酷くないですか。

日比野 ちよつと冷静になりましたか。

仙波 田頭さん、ほら、職業に対する偏見をなくしていくのが課外授業の目的じゃないんですか？我々がそんなこと・・・。

田頭 そんなの嘘ですよ。だって私、自分の子供にキャバ嬢になって欲しくありませんもん。みんなだってそうじゃないですか？ですよ？徳永さんだってそうですよね？

徳永 え。

田頭 だってさっきアンケートで『大工はつぶしがきかない』って書いてたの、徳永さんのお子さんですもん。

近藤 え。

徳永 ・・・・。

田頭 お子さんにはそういうこと、言ってるんじゃないですか。

徳永 ・・・・別に私は・・・もしかしたら、子供に聞かれて？いろいろアドバイスはしたかもしれませんが・・・そんな、仕事を差別するようなことは／

田頭　でも、お子さんに大工にはなって欲しくないんですよね？

徳永　それは・・・子供が判断することですから／

仙波　同じことですよ、子供にそんなこと教えてるんですから。

徳永　あの、それは・・・。(何か言おうとするが言葉が出てこない)

仙波　近藤さん、どうします？

近藤　え。

仙波　徳永さん、お子さんを大工にしたくないんですって。

近藤　それは・・・

徳永　ですから私は、そんなこと／

近藤　自由、ですから。徳永さんは、徳永さんのお考えが。

仙波　でもお子さんの気持ちは／

田頭　自由、でいいじゃないですか。親が、自分の子供にこうなって欲しいって願うのは自由ですよ？「差別」なんて言うから、変な風になっちゃうんです。一之瀬さんがキャバクラで働くのは自由、自分の子供に話を聞かせるのも自由、です。でも、ウチの子にはそんな話、聞かせないでください。ウチの子は、キャバ嬢にも、そんな世界に興味を持つ子にも、なって欲しくないんです。

一之瀬　・・・。

仙波　コンビニの話は、していいんですか？

田頭　ええ、ぜひ、聞かせてやってください。子供たちにも、良い勉強になると思います。

仙波　それはありがとうございます。

奥村　じゃ、私もスーパ－の話しよつか？古い野菜から買わせるテクニクとか？売れ残りをどうやって新鮮なサラダに捏造して・・・／

田頭　あの、真面目に話してるんですけど。

奥村　・・・私も真面目、だけど。

田頭　・・・すみません。

奥村　え、なに、仙波さんは経営者だけど？私はパートだから駄目なの？あ、そっか、旦那に逃げられるような女だから？やっぱ子供に話させられないよねー。

田頭　いえ、そういうことじゃなく・・・その、冗談みたいな感じでおっしゃったので、

奥村　思わず。

田頭　冗談だよ。

奥村　え。

田頭　冗談だよ。

奥村　え。

奥村　冗談でいーじゃん、こんなの。明日からキャバクラで働きますってんじゃないんだからさー。アンケートで一位になりましたーなんて、ちよっとノリで？みんなで書こう！ってなったとか、そーいうんでしょ？どーせ来月聞いたらケーキ屋とかになつてるよ。こんなのさ、「ガキが生意気になに言ってるんだバカ」って言えばいいだけの話じゃん。それを真面目に？「ウチの子の人生が」とか、ちよっと余裕がなさすぎんじゃないの？

田頭　・・・。

御手洗　おっしゃることは分かります。でも、私、子供たちの書いたアンケートを見て、と

てもいい加減に書いたように思えないんですけど。

奥村 だとしても、子供と一緒に頑張って突っ走らなくていいんじゃないの？まあ、無理やり押さえつけたり、放ったらかしたりする大人よりはいいと思うけど、あ、これ私のことか、ハハハ・・・。

田頭 押さえつけてでも止めなきゃいけない時はあると思います。

奥山 ま、それはね。マザコンのヒステリー男と駆け落ちするって言ったら、さすがに私も止めるけど。あ、これも私か・・・止めてもらえばよかった。

田頭 今なんですよ。止めなきゃいけない時は。

奥村 ……何、どうしたの。

田頭 ……なんか最近、変に色気づいちゃって？派手な格好したがるんですよ。言葉づかいも乱暴で、私の言うことなんて全然、聞かないし・・・(美樹に) ねえ、そうじゃない？

美樹 そんなことないですよ。麗羅ちゃんいつも・・・優しくて・・・全然、そんなふうじゃ・・・。

田頭 本当に？

美樹 ……あの、私はバスケの時しか見てないんで、分からないですけど・・・すみません。

日比野 あの、今ぐらいの年頃だと、特に女の子は、急に大人びたりするものです。決してそんなに／

田頭 麗羅も、キャバ嬢って書いたんですか？アンケートに。

御手洗 ええ。あ、あの、もしよかったら、お読みになりますか。実際に読んでみたら／だから、絶対に、認められないんです。

田頭 ……。

一之瀬 あの、お名前・・・？

奥村 ああ、田頭さんね。

一之瀬 田頭・・・さんて、何者なんですか？

田頭 え？

一之瀬 なんかさつきから、すっごい上から目線なんで・・・みんな文句言わないし？よっぽどすごい人なんだろうなって思ってる。

田頭 そんなつもりはないですけど。

奥村 ……まああれだ、田頭さんは・・・弁護士だっけ？そういう頭良い仕事してるからさ、私らみたいなバカとは違うのよ。ねえ。

一之瀬 弁護士なんですか？

田頭 私は、会計事務所働いてて。

一之瀬 会計士？

田頭 いや、会計士ってわけじゃないですけど、いろいろと先生方のサポートをしたり・・・。

一之瀬 じゃ私と同じじゃないの。センセイガタに媚びて、お金貰ってんでしょ。

田頭 そういふんじゃありません。私も会計のことは、いろいろ勉強してきましたから。

調査とか資料作成とかは、先生方と一緒に・・・。

一之瀬 じゃあ会計士やればいいんじゃない。

田頭 それは・・・そんな簡単にできるもんじゃないんで。
一之瀬 もしかして試験通らなかったとか。

田頭 ？
一之瀬 何、凶星？

田頭 ・・・・確かに、一時期、公認会計士目指してたことはありますけど。
一之瀬 で、受からなかったんだ。何年も真面目に勉強して、青春棒に振って？でも未練がましく会計、会計、やってんだ。受かった人たちへこ頭下げて使われて？偉そうに言うだけあって立派な人生ですね。

奥村 一之瀬さん。

一之瀬 いいですよ。私、話さなくても。嫌なんですよね？自分の子供にキャバ嬢の話聞かせるの。

田頭 ？
一之瀬 その代わり、あなたが話してください。だったら代わってあげますよ。

田頭 え。

一之瀬 ・・・・どうしました？あれだけ偉そうに言うんだから、それは立派な生き方してきてたんですよ？子供たちにも話してあげてくださいよ。

日比野 あの、ここまでにしましょうか。ね、お二人とも冷静に・・・。

一之瀬 どうしたんですか？遠慮しないで。ほら。

日比野 取りあえず落ち着きましょうか、ね。

一之瀬 (徳永に) あなたでもいいですよ。キャバ嬢なんかにしたくないんですよ。
徳永 ・・・・

一之瀬 (全員に) 誰かいないんですか？私の人生の方がキャバ嬢より立派だから、代わりに話しますって。先生でもいいですよ。

日比野 あの。

一之瀬 いいんですか？子供たちみんなキャバジョーに憧れてるんですよ。放つとくと、みんな私みたいになっちゃいますよ。

田頭 ・・・・分かりました。話します。

一之瀬 へえ、大丈夫ですか？キャバジョー待ってる子供たち、納得させられます？

田頭 ・・・・今は、見かけの格好よさだけみて憧れてるかもしれないですけど、大きくなれば、分かってきます。ちゃんと努力するのが一番だって。

一之瀬 私も努力してますけど？

田頭 ？

一之瀬 この年で、キャバ嬢続けるの結構大変なんですよ。話のネタ仕込んで？客との会話の内容全部覚えて、マメに営業かけて？メイクもエステもバカにならないし？必死なんです。

田頭 それは大変だとは思いますが・・・それは、今、目の前のことをなんとかすることですよね。努力っていうのは、もつと、何ていうんでしょう、将来のことを考えてて、こつこつと・・・。

一之瀬 こつこつ勉強しても落ちたじゃないですか、試験。
田頭 ・・・・

一之瀬 どうします？それってすごく悪い見本じゃないですか。『将来に向かってこつこつ真面目に勉強しなさい。お母さんは落ちたけど。』って。言えます？それでも。『お母さんみたいな人生選びなさい』って。

田頭 ……。

一之瀬 どうなんですか？

田頭 ……試験に受かるだけが人生じゃないですから。私は、試験には通らなかつたけど、身に着いた知識で、今の仕事で十分力を発揮できています。それに大事な夫と子供を授かって、素敵な家庭を持つことができました。私は…私の人生に誇りを持っていきます。

一之瀬 本当に？本気でそう思ってますか？じゃ、

なんでそんなに必死なんですか？悪いけど、全然格好良くないんですけど。ダサいんですけど。だから子供も付いてこないんじゃないですか？

近藤 ダサくないですよ。

一之瀬 え。

近藤 田頭さんは格好いいと思います。あの、頭が良くて、いつもみんなを盛り上げてくれて…ねえ。

仙波 え…ああ、そうですね。

近藤 お仕事も…そりや、試験は受からなかったかもしれないですけど…専門的なお仕事を、正社員としてやりながら、お子さんもちゃんと育てて…もう、完璧っていうか、私にとってはすごく格好いい人で…お子さんも、今はちょっと、反抗してるかもしれないですけど、心の底では、お母さんのこと、すごく誇りに思ってるんだらうなって、思います。

田頭 ……あの、ありがとうございます。

近藤 一之瀬さんも…今日、初めてお会いしたのに、こんなこというの変ですけど、お綺麗で…魅力的で…。私、さっき、怒ってらした時、不謹慎？かもしれないですけど、うわあ…格好いいな、なんて思っちゃって…。あの、何ていうんでしょう、こんな子がいるなら、ウチの旦那もキャバクラ通っちゃうの、仕方ないなっていう…あ、変な意味じゃないですよ。

一之瀬 あ、はい。

近藤 単純に…ええと、その、懂れた？っていうか凄いなって。七海ちゃんが、お母さんに学校に来てもらって、みんなに自慢したいって、なんか分かるなって…ハハ、何言ってるでしょ。

一之瀬 ……。

近藤 自分と比べてどうこう言うなんて、その、生意気ですけど、お二人とも私なんかよりずっと素敵で…。ごめんなさい、えーと、何が言いたいかというと、二人とも、何ていうか、すごく良いお母さんだと思ってる…その、どっちが偉いとか偉くないとか、そーいうんじゃないと、思います。

全員 ……。

近藤 ……あ、すみません。やっぱり何でもありません。あの、忘れてください。

奥村 ハハハ、近藤さん最高。一之瀬さん、格好いいって。

一之瀬 やめてよ。

日比野 あの・・・なんだか、何の話をしてるのかも、よく分からなくなってしまいました。えーと、すみません。結局、どうなんでしょう。田頭さんがお話されるってことになった、んですかね？

田頭 ・・・・私は、いいです。一之瀬さんがしゃべればいいんじゃないですか。

日比野 え。

徳永 田頭さん。

日比野 あの・・・それで、いいんですか？

田頭 いいんじゃないですか？

日比野 えーと、これは・・・田頭さんが、賛成に回ったということ・・・えと、もともと、反対だった方は・・・。

一之瀬 私、喋りませんよ。あの人（田頭）が話すんじゃないんですか。

日比野 え？

一之瀬 さつきそう言ったじゃないですか。

日比野 ・・・・えーと、どうしましょう。何か話が変わな風になっちゃいましたね。

鈴木 あの、もしよかったら、このへんで休憩を入れませんか？ずっとしゃべりっぱなしですし・・・。

一同 何となく頷く。

日比野 ・・・・そうですね。ちよつと、クールダウンしましょうか。それでは・・・あの、10分。10分だけ休憩とりましょう。

田頭が会議室を出ていく。

田頭を追うように徳永も会議室を出る。

奥村が一之瀬に向かってタバコを吸う動作をする。

一之瀬 あ、私、ちよつと。（携帯を示すとそのまま会議室を出ていく）

奥村 あ、じゃあ。（仙波を見る。）

仙波 ああ、私、止めたんですよ。

奥村 え、マジすか？

仙波 もう1週間。

奥村 じゃ、1週間記念で（タバコを渡す）。

仙波 いや、本当もう、止めたんですよ。

奥村 いいから付き合ってくださいよ。喫煙者少なくて肩身狭いんですよ。

仙波はぶつぶつ言いながら奥村に着いて会議室を出る。

鈴木 （御手洗に）先生。

御手洗
？

鈴木 ちよっと、いいですか。(外に出るよう促す)

鈴木と御手洗が会議室を出ていく。

美樹が途方に暮れた顔で俯いている。

近藤がそつとお菓子差し出す。

美樹 ……もう、なんかよく分からなくなっちゃいました。

近藤 ハハ、難しいよねえ。

日比野が美樹を見る。

美樹 (日比野の視線を感じて)こんなんじや駄目ですよね。先生になろうっていうのに。

分かってるんです。でも……。やっぱ、教師向いてないのかも。

近藤 ……。

日比野 俺も分からない。

美樹 ？

日比野 俺も向いてないのかもね、教師。

近藤 あの、私には2人ともすごく、教師っぽく見えますけど。

日比野 ……。

美樹 日比野先生は、どう思ってたっしやるんですか。

日比野 え。

美樹 ……その……キャバクラの話してもらったっていう。

日比野 どっちでもいい。

美樹 え。

日比野 保護者の皆さんに納得して帰ってもらえれば、結論はどっちでもいいよ。

美樹 ……先生ご自身には、ないんですか、学校をこうしたいとか、子供たちをこうしたいとか……。

日比野 関係ないよ。

美樹 え。

日比野 ここは、保護者のみなさんの意見を聞く場、学校の意見を保護者に理解してもらおう場だ。俺にはそれをしっかりと回していく責任がある。俺個人の、つまらない意見なんて、出る幕はないよ。

美樹 ……。

日比野 (近藤に)偉そうなこと言って、さっきは何にもできてなかったですね。

近藤 日比野先生は、しっかりやられていますよ。

美樹 でも、でもですよ。学校が間違ったり、保護者が間違っことだつてあるじゃないですか。

日比野 誰が分かる？何が間違つて、何が正しいかなんて。

美樹 それは……。

日比野 俺には分かんないよ、そんな難しいこと。だから考えない。ただ、目の前の自分の仕事だけを、こなしてる。それだけでも、既に、手に余ってるんですけどね。

近藤 ハハ……。

美樹 ……。

日比野 がっかりした？

美樹 ……いえ。

日比野 (近藤に)でも、安心してください。お子さんは大丈夫です。

近藤 ?

日比野 15年教師やって分かったんですが……こんなダメ教師でも……ダメ親だったとしても、案外、子供はちゃんと育つんですよ。こっちが苦労しようが、悩もうが、全然関係ないんです。だからこんな奴でも、安心して教師でいられる……あ、他の方には内緒ですよ。

近藤 ハハ、先生はやっぱり立派な先生ですよ。

美樹 ……。

日比野 (卒業文集の束を指して)あ、これ、ありがとう。

美樹 あ、はい。

日比野 (文集を整理しながら)こないだ自分が小学生の時に書いたの見つけたんですよ。『わたしのゆめ』って欄があったんですけど、何て書いてあったと思います？

近藤 何ですか？

日比野 すっかり忘れてたんですけどね、『せんせい』って。

近藤 すごい。夢がかなったじゃないですか。

日比谷 いや、寧ろ、過去の自分に呪われてるような気がしましたよ。

近藤と日比野は雑談をしながら文集を片付ける。

慌ててそれを手伝う美樹。

徳永と田頭が会議室に戻ってくる。

御手洗が会議室に戻ってくる。

御手洗 (日比野に)先生、教頭先生から、先に進めておいてください、とのことですよ。

急ぎの電話があったみたいで……。

日比野 分かりました。

仙波と奥村が喋りながら戻ってくる。

近藤 あれ、早かったですね。

奥村 それがさく喫煙所なくなったって。

日比野 あ、すみません。お伝えし忘れてました。

奥村 先生、勘弁してくださいよ。

日比野 最近、ボランティア活動で学校にいらっしやる方が増えて、中にはその、マナーが悪い方もいらっしやるってクレームが多くて。

奥村 あく私もう無理。ヤニ切れで吐きそう。

御手洗 あの・・・これ、子供たちが書いたものです。

御手洗が紙の束を母親たちに差し出す。

近藤 あく可愛い、イラスト入りなんですわね。

御手洗 もともと、総合学習の時間のテーマだったんです。「自分がなりたい職業」を調べて書いてみましようっていう。そしたら、課外授業のゲストもみんな決めてようって話になって・・・。

奥村 (めくりながら)あ、いた、キャバジョー・・・確かに、書いてる子いるね・・・。

仙波 というか先生、子供たち、ちゃんとキャバクラ理解してますよ。横長のソファアに照明と、名刺渡してるし。ディテールが完璧。

御手洗 ドラマで見えますからね。

美樹 あ、麗羅ちゃんの、ありますよ。

田頭に渡そうとした紙を仙波が奪い取る

仙波 『わたしは、おとなになったら、きゃばじょーになりたいです。なぜなら、てれびで“よるのじょうおう”のリオナがかっこよかったからです。でも、わたしは、ひととと、はなすのがにがてなので、しめいをとったりできないかもしれない。そのときは、ようぶくをつくるひとになりたいです。リオナは、しんぶんや、ほんをよんで、べんきようしていたので、わたしもいっばい、べんきようしなきゃいけないと、おもいます。』

田頭 ……。

近藤 しっかりしてるじゃないですか。

御手洗 確かに私たちから見ると未熟なんですわ、子供たちなりに、真剣に考えているんです。

仙波 (めくりながら) っていうか、何か全体的に弱気？ですよね・・・『むずかしいかもしれないけど』とか、『たいへんだけががんばります』とか？・・・あ、ひとりいた、『日本代表に入ってワールドカップで無回転シュートを決める』って。子供はこーじゃないと。

御手洗 最近暗いニュースも多いですから。子供たちもなんとなく、そういうこと、感じてるのかもしれない。

奥村 大人がみんな、大変そうな顔してるからじゃないの？

仙波 自分だってそうじゃないですか。

奥村 あ、そっか。(手に持った紙に向かって)ごめん。私という存在がキミらの将来に不安をかきたてる。

美樹 そんなことないですよ。奥村さん見てたら、人生何があっても大丈夫だろうなって、元気が出ます。

奥村 美樹ちゃん。それ、褒めてないから。

近藤 でも、私だつて子供の頃、そんな大した夢がなくて、そういう書くの苦勞してた気がしますよ。

仙波 ……昭和の最後って93年でしたっけ？

近藤 え。

仙波 さつき見てた中に、そのへんの年、ありませんでした？

近藤 (手で整理していた卒業文集をみて) あ、はい。えーと確か……。

仙波 私が卒業した年ですよ。

仙波は近藤から昭和93年の卒業文集を受け取る。

ページをめくって自分の書いた文章を探す。

仙波 ……ハハ、ちよつとイタいな……『ぼくは、“仙波酒店”をもつとおおきくして、にはんじゅうに、ちえーんてんをだします。おさけだけじゃなく、たべものや、ようふくや、げーむもうるので、もつと、にんきがでてくるとおもいます。』……ハハ、何でも売るようになったし、全国チェーンだけど、肝心のところが叶ってないですね。

近藤 ……。

仙波 これ、親父の口癖だったんですね……全国チェーン。ダイエーの……誰でしたっけ、創業者の……あ、中内功？を尊敬してて、本とか無理やり読まされましたよ。どつちも消滅しちゃいましたけど。

近藤 それじゃ今度は、勇人さんに夢を継いでもらえばいいんじゃないですか。

仙波 ……どうでしょう。あいつ興味持ってくれんのかな……。だいたい、店があと10年持つかどうかも分からないですし？

間。

田頭 ……あの、私のも探してもらっていいですか？

近藤 え？……あ、はい。

仙波 えー2年違うから、平成……。 (徳永に) 探します？ ついでに。
徳永 ……。

手分けして棚と段ボール箱の中から卒業文集を探す。

「まだ向こうに残ってる分じゃないかな？」等のセリフ。

一之瀬が入ってくる。

一之瀬 あ……ごめんなさい。電話してて。

日比野 いえ、まだ時間来てないですから。
 奥村 一之瀬さん、この卒業生じゃ・・・ないよね。
 一之瀬 え？うん、違うけど。
 奥村 いや、今、みんなの昔の卒業文集見てて。
 一之瀬 ・・・・そうなんだ。
 美樹 あ、ありました！

美樹が田頭に渡そうとした卒業文集を仙波が奪う。

仙波 私も公表したんだから。

田頭 ・・・・いいですよ。

仙波 (ページをめくりながら) 何組ですか？・・・田頭、田頭・・・。

田頭 高橋です、旧姓は。高橋亮子。

仙波 ああ・・・(ページをめくる) あった。6年1組 高橋亮子。『わたしのゆめは、ミュージシャンになることです。』

田頭 ・・・・。

奥村 え、もしかして目指してたの？

田頭 別に・・・ただ、書いてただけですよ。小学生の時の夢ですよ。

仙波 女子だけでバンドをつくってオリコン1位を目指すんじゃないですか？プリプリを超えるって書いてますよ。

田頭 そんなの・・・ノリで書いただけですよ。

仙波 今度、カラオケ行きましょうよ。歌声聞かせてください。

田頭 ローソンの社長になったら歌ってあげますよ。

仙波 あ、じゃーその時はCMソングお願いします。

奥村 あれ、一之瀬さんもバンドやってなかったっけ。

一之瀬 え、高校の時？ギター。ちよっとだけけど。

奥村 えーどんなのやってたの。

一之瀬 ジュデイマリとか。あーでも一回、『世界で一番熱い夏』？演った気がする。
 定番だよね。

田頭 ・・・・。

美樹 (徳永の卒業年の卒業文集を手に) 徳永さん？

徳永 ああ・・・え・・・門田です。門田玲子

仙波 (美樹の手から卒業文集を奪って)・・・か・・・か・・・門田・・・あ。みなさん聞いてください。・・・『6年2組 門田玲子。わたしのゆめは、ケーキ屋さん』
 (再び吹き出す)。

徳永 ・・・・何で笑うんですか。

仙波 いや、何か、イメージが。

徳永 イメージが何ですか。

仙波 だって、徳永さんがケーキ作ってる姿を想像したら・・・。

奥村 仙波さん、さつきから嫌がらせが小学生。

仙波 いや、これ読んだら子供の時の気持ちを思い出しちゃって。

美樹 (文集を探す) 奥村さんは……？

奥村 あ、いや、ないない。私ここの卒業生じゃないから。っていうか、卒業生じゃなくて良かったわ。

今、子供の頃の自分のピュアな夢とか見せられたら、現実とのギャップでショック死するから。

仙波 みんなそうなんじゃないですか？誰も夢が叶ってないし。子供たちに偉そうなこと言えないかな……。

近藤 日比野先生は違いますよ。小学生の時から、先生になりたかったって。

奥村 おお～さすがですね。

日比野 ハハ……やめてください。

仙波 一之瀬さんはどうなんですか？子供の頃の夢。

一之瀬 ……看護婦かな。

仙波 へえ～なるほど。

奥村 仙波さん。

仙波 ……何ですか。何も言っていないじゃないですか。

奥村 何も言わなくても、今のはセクハラです。

一之瀬 最低。

仙波 ……ちよつと。

美樹 近藤さんはどうでしたか？

近藤 私はいいよ。

美樹 え、何なんですか？教えてくださいよ。

近藤 恥ずかしくて話せるようなものじゃないんで……あ、一之瀬さん、これ、七海ちゃん

美樹 さんが書いたの、見ますか？

美樹 ごまかさないでください。

一之瀬に渡そうとした紙を仙波が奪い取る

仙波 『わたしのおおきくなったら、おかあさんみたいな、かっこいいキャバジョーになります。』

奥村 おお～。

仙波 『わるいオーナーや、いじわるなライブルにもまけず／＼』

奥村 ？

仙波 ……。

奥村 早く～。

仙波 ……『アデージョ』っていうんですか？一之瀬さんのお店。

一之瀬 違いますけど。

仙波 『ソーブアデージョ』って書いてますけど、ここに。

一之瀬 ！

仙波 ……大人になった七海ちゃんが、名刺渡してますよ。『ソーブアデージョ』って

一之瀬 書いたやつ。何で七海ちゃんは、こんなの書いたんでしょね。
・・・テレビで見たんじゃないですか。

仙波 キャバジョーのドラマに、『ソープ』は出てこないでしょう。

日比野 あの、失礼します。

日比野が仙波から紙を奪い取る。

近藤 あの、どういことですか？

奥村 一之瀬さん？

一之瀬 ・・・。

美樹 (日比野が持つ紙を横から覗き見て) え、この名刺のどこですか？うん・・・。

日比野 いやこれは、確かにそう読めなくもないですが・・・。

徳永 先生。

徳永は日比野から紙を受け取ると、しばらく見つめている。

徳永 ・・・小さい子供の字なので、ちょっと分かりにくいですけど、そう思って見れば、そう書いているようにしか見えないですね。

仙波 お母さんの持つてる名刺を見たんじゃないですか？格好良い、キャバクラの名刺だと思っ、意味も分からず書き写したんじゃないですか。

一之瀬は黙って紙を受け取るとしばらく見つめる。

一之瀬 ・・・。

奥村 ネットで見たとかさ・・・。

一之瀬 名刺ね・・・。いつも店に置いてんだけどな・・・何かに紛れて持って帰っちゃったのかな。

日比野 それは・・・そのようなお店で、働いていらっしやる、ということでしょうか。

一之瀬 あ、キャバも嘘じゃないですよ。まあぶっちゃけ、ソープの方が客取れるんで、そっちメインですけど。キャバはオラオラ系で行けるんで、ハハ、そっちでストレス発散してるから。

仙波 掛け持ちOKなんですか？

一之瀬 もちろん内緒だよ。バレたら速攻、枕扱いされるし。っていうか、キャバじゃ何十万使っても基本やらせないけど、ソープじゃ三万出せばやれるんだよ？男ってバカだよな。

仙波 アデージョって熟女系ですか？

一之瀬 あーそれ、すごい言われるんだけど。違うから。若い子も普通にいるし。キャバは熟女系だけ。

仙波 えー一之瀬さん、まだ若いじゃないですか。

一之瀬 そーいうのいいから。20代後半でオバさんの世界だし？でも、最近の男は草食系

仙波　で金ないから、客層も高齢化してて、ぶっちゃけ、熟女系の方が客取れんだよね。
へえ。

奥村　盛り上がってるとこ悪いんだけどさ、みんな完全に置いてかれてるから。

一之瀬　・・・。

日比野　あの、今みたいなお話を、子供たちにするおつもりじゃ・・・ないですよ。

一之瀬　してもいいですよ。

日比野　ハハ・・・やめてください。

一之瀬　・・・。

奥村　一ノ瀬さん、いいから落ち着きなよ・・・っていう私も落ち着いてないんだけど。
あーもう、いろいろいきなり過ぎて、爆発しそう。とりあえず、落ち着こう、お互い。ね？一旦休憩・・・あー今、休憩中か。

一之瀬　落ち着いてるよ。

奥村　どこが。いきなりぶっちゃけて、何があったの。っていうか、お仕事、そんなに大変なことになってるなんて、知らなかったし。「相談乗るよ」なんて軽く言えることじゃないと思うけど。

一之瀬　ま、言っても、しょうがないしね。

奥村　寂しいこと言わないでよ。

田頭　必死ですね。

一之瀬　は？

田頭　さつきは人のこと、いろいろおっしゃってましたけど。自分だって必死じゃないですか。

奥村　田頭さん、もういいでしょ。

田頭　さつきから強がってますけど、じゃあ何で最初から、ソープ嬢って言わなかったんですか？風俗じゃない、風俗じゃないって、ずっと言っていましたよね？立派な風俗嬢じゃないですか・・・なんでお子さんに言わなかったんですか？お母さんはキヤバ嬢なんかより格好いい、ソープ嬢なんだよって。

問

近藤　必死でいいじゃないですか。自分の子供には、格好いい親でいたいですよ。私なんて、そーいうのとづくに諦めてるから、頑張ってる一之瀬さんを見ると、恥ずかしいですよ。

徳永　そうですね。風俗のお仕事で苦勞されて、お子さんにも言えず、悩まれてたんですよ。そんな時にもし、子供がキヤバクラのドラマに夢中になってたら・・・そりゃねえ、お母さんもキヤバ嬢だよ、って言いますよ。

一之瀬　バカにしてんの。

近藤　え・・・いや、そんなつもりは・・・ただ、一之瀬さんの気持ちも分かるというか、ご苦勞されてきたのかなと・・・。

徳永　あの、落ち着いて聞いてください。私たち、一之瀬さんのことを心配してるんです。
一之瀬　はあ？

徳永 今は、お綺麗だから、ちやほやされてるかもしれないけど、でも、いつまでも続けられる仕事じゃないですよね。

一之瀬 知ってますけど、それくらい。

徳永 お願いだから落ち着いて聞いてください。・・・あの、先ほどお話し伺っていたら、おひとりでお子さんを育てられて・・・ずいぶんご苦労されたと思います。

一之瀬 ・・・。
 徳永 そんな状況で、そんなお仕事に行かれたというのは、仕方なかった面もあると思うんです。分かりますそれは。分かるっていうか、本当には分かってあげられてないとは思ってますけど。

一之瀬 はあ。何言ってるんですか。

徳永 でもね、私も、少なくともあなたより長く生きてきて、いろんな人を見てきました。そういうご商売をされてる方もいましたよ。みなさん本当にしつかりされてて・・・でもね、やっぱり、年取ると続けられなくなっちゃうでしょ、それで・・・ねえ、金銭的に、その、苦労されたり、人間関係とか、大変みたいで・・・十分にお子さんを、育てることができなくなったり、しっちゃって。

一之瀬 ・・・。

徳永 あの、一之瀬さんがそうなるって、言ってる訳じゃないですよ。でも、さっきからお話ししてて、すごく社交的で、頭も良い方みたいだし、早めにほかの道を探した方が・・・ほら、(周囲を見ながら)私らくらいになつてからじゃ、遅いから。余計なお世話かもしれないけど、

一之瀬 余計なお世話です。

徳永 ・・・。

一之瀬 え？あなた私の親？何で他人にこんなこと言われなきゃいけないか分かんないんだけど。

徳永 他人って・・・そりゃ、他人かもしれないけど、同じ親として・・・ほら、せっかく同じ学校の親として、一緒になったんだから、ねえ、いろいろと、心配になるじゃないですか。

近藤 七海ちゃん、ウチの子と同じクラスなんです。(田頭に向かって)麗羅ちゃんも、やっぱり、自分の子と同じように、気になるんです。

一之瀬 なに上から見てんの。

近藤 いえ・・・あの・・・ごめんなさい。

徳永 お気を悪くしたなら、謝ります。

一之瀬 謝って。

徳永 ・・・すみません。

一之瀬 ・・・みなさん、ご心配頂きどうもありがとうございます。年取ってからのこともちゃんと考えて、準備してますし、もう少し大きくなったら、ちゃんと子供にも話します。私も、ウチの子も、大丈夫です。少なくとも、みなさんよりは。みなさんのお子さんよりは。だから他人が余計な口を、出さないでください。

近藤 ・・・。

徳永 ・・・。

奥村 私も他人？

一之瀬 ……

奥村 どうなの。

一之瀬 ……他人だよ。

奥村 ……そっか、それじゃ、仕方ないね。余計な口出してごめんね。

一之瀬 ……

奥村 でも…じゃあさ、なんでぶっちゃけたの。

一之瀬 ……

奥村 (七海が書いた絵を指して) こんなのいくらでも誤魔化せたじゃん。適当な理由つくってさ。一之瀬さんならできたでしょ。なんで正直に話しちゃったの。あれだけぶっちゃけていて、心配するな、他人だなんて…勝手すぎるよ。

一之瀬 ……確かに。何で言っちゃったんだろ。

奥村 ……

一之瀬 なんかさー。急に、黙ってるのが嫌になったんだよね。

奥村 ……何それ。

一之瀬 それに、あの人(田頭)にあれだけ偉そうに言ったのにさ…隠してるのは、フエアじゃないでしょ。

田頭 どうでもいいです、そんなの。

一之瀬 そうですか。

田頭 どうせなら、最後まで意地張って格好つけてください。

一之瀬 はあ!?

田頭 少なくとも、お子さんには…同じクラスなんです、うちの子。子供たちにまですぶっちゃけると、迷惑なんです。

一之瀬 ……ホント、ウザいな、お前ら。

田頭 ……

鈴木が入ってくる。

鈴木 遅くなって申し訳ありません。6年生の親御さんから、急ぎのご相談がありました。

全員 ……

鈴木 あ、えーと…

日比野 あの…ちよつといういろ…その、議論になりました…

鈴木 それで、あの…

日比野 あ、えくと、どうでしょうか。

一之瀬が黙って立ち上がる。

一之瀬 そろそろ仕事なんで。

鈴木 ……そうですか、お忙しいところありがとうございます。ちなみに、先ほどのお話は…?

一之瀬 ……みなさんの好きにすればいいんじゃないですか。私は、どうでもいいです。
鈴木 ……そうですか。分かりました、あとは我々で検討させていただきます。

御手洗 あの、本当に申し訳ありませんでした。

一之瀬 先生。

御手洗 私の、その、不注意で、このようなことになってしまっ……。

一之瀬 ……ま、いいです。子供に「格好いい」なんて書かれて、ちよつとは嬉しかった
んで。(七海が書いた紙を御手洗に渡す)

奥村 (去っていく一之瀬に) 一之瀬さん。

一之瀬 ……。

鈴木 あの、どうしました。

一之瀬は出ていく。

日比野が鈴木に事情を説明している。

徳永 あの、それは他のお子さんは見てないんですよね。

御手洗 はい……子供たちに書いてもらったのを、集めただけですから。

徳永 大問題になるところでしたよ。

御手洗 本当に、申し訳ありません。

田頭 先生、先生の言う、子供の声を聞くって、こういうことなんですか。

御手洗 いえ、決してそういうわけでは。

徳永 お分かりになりましたよね。まだ、自分のやってることの意味も分からない、幼い
子供たちなんです。

鈴木 あの、みなさま、大変申し訳ありません。ちよつとした、その、行き違いが重なっ
てしまったということではありますが、みなさまのお子様にとんでもないお話を聞
かせかねなかったということ……本当に、何とお詫びすればよろしいかと……。

奥村 まあ、結果として、事前に分かったんだから、いいじゃないの。先生も、悪気はな
かったのは分かるけど、こういうこと、もうちよつとしっかりしてもらわないと……。
まだ終わってませんよ。

徳永 え。

奥村 奥村さん、しっかりしてください。一番、心配なのは、奥村さんのお嬢さんなん
ですよ。

奥村 何が言いたいの。

徳永 一之瀬さんのお子さんと仲がいいんですよね、家にも遊びに来てるって／
奥村 待って……待って。まあ、私もかなりショックで……正直、ちよつとまだ気持
ちがまとまってるだけだよ。でも、だからって子供同士のことまでどうこうっ
ていうのは……。

田頭 なにのんびりしてるんですか。自分のお子さんのことですよ。

御手洗 すみません。それは、七海ちゃんを／

田頭 先生は黙っててもらえますか。

御手洗 ですが。

日比野 いや、さすがに今の話は聞き流せないですね。

仙波 職業差別の次は、イジメですか。

御手洗 徳永さん、先ほど、一之瀬さんの力になりたいって、あれだけ……。

徳永 勘違いされると困るんですが……私は、一之瀬さんのお子さんをどうしよう
って言ってるわけじゃないですよ。彼女も、被害者です。もちろんお母さんも。そ
れはそれで、いろいろお手伝いをしていかなきゃいけないと思います。でも一
方で……そういう家庭環境のお子さんが、周りに悪い影響を与えないよう、何か
しらの手立てを考えなきゃいけないと思うんです。

仙波 手立てって何ですか？

徳永 それは……これから、みなさんと一緒に考えて……。

仙波 要は、仲間はずれにしろってことじゃないですか？

徳永 そんなことは言ってます。なんて言うんでしょう、七海ちゃんが、これから間違
った道に行かないように、その、ちゃんとサポートして……。

仙波 支離滅裂なんですけど。あの、何をおっしゃってるのか、まったく分かりません。
ですから……。

仙波 だから何なんですか？あなたが言ってること、ぜんぶ上辺だけじゃないですか。

徳永 ……分かっています。分かっていますよ、そんなこと。でも……上辺だけでも、私
たちがしつかりしないと、しょうがないじゃないですか。

仙波 頑張って綺麗ごとで取り繕って、何を守ってるんですか。親の権威ですか？保護者
会学年代表っていう立場ですか？

徳永 ……子供たちに決まってるじゃないですか。

仙波 ……ハハ、今さらそんなこと。

鈴木 徳永さん、みなさん、私どもの不手際で、皆様を大変に……その、不安にさせて
しまったことをお詫び申し上げます。皆様のお子様には決して、ご心配されている
ようなことにならないように……。

田頭 いいじゃないですか。もう、そんな建前にこだわらなくても。さっき一瞬、少し
は分かりあえるかなって思ったけど……絶対、無理です。あの人とは一緒にやつ
ていけません。私たちとは、違う世界の人なんです。

奥村 いい加減にしてください。一之瀬さんは……。

田頭 分かっています。分かっています、そんなことは……でも、無理なんです。

奥村 田頭さん……。

近藤 私も……そうかもしれません。さっき言われて気づいたんですけど。私も、最初
から、一之瀬さんを下に見てたのかなって……。

御手洗 でも、子供たち同士は関係ないですよ。

田頭 子供たちだからです。

御手洗 どういうことでしょう。

田頭 先生、いいかげんにしてください。先生にとっては大勢いる生徒のひとりかもしれ
ないけど、私たちにとっては、かけがえのない、たった一人の子供なんです。

御手洗 ……そんなことありません。麗羅ちゃんも、七海ちゃんも、私にとってはかけが
えのない生徒なんです。

田頭 ……先生、くじけないですよね。あれだけ言われたのに。

御手洗 「建前」とおっしゃるかもしれませんが……子供たちは、全員、私の大事な生徒なんです。

田頭 その自信はどこから。

御手洗 自信……なんてないです。私も必死なんです。みなさんと一緒です。

鈴木 すみません、失礼なことを申しまして……。

田頭 いえ……頼もしいと思います。

御手洗 え。

田頭 ……私には、そこまで自信持てないです。大人同士ならいいんです。自分の気持ちは、いくらでもごまかせるから。でも、子供は……怖いんです。あーいう世界に憧れて、反抗して……子供にダサいって思われるのが怖いんです。

奥村 いーじゃない。ダサいって言われたら。子供はそうやって、大きくなるもんだよ。

近藤 田頭さん、どうしたんですか。自信持ってくださいよ。そんな、田頭さんにそんなこと言われたら、私、立つ瀬ないですよ。

田頭 ハハ、そうですね。なんでこんなに弱気になってんだろ。あんな人……離婚して？体売ってなんとか子供育てて？のこのこんなところ来て、恥さらして？それでも最後まで必死で格好つけて？……ハハ、何にも負けてないのに。全部、私の方が勝ってるのに。なんで。

御手洗 田頭さん、あの、勝つてるとか、負けてるとか、そういうことでは、ないんじゃないでしょうか。

田頭 先生、もう止めてください。

御手洗 ……すみません。

田頭 ……。

日比野 いや〜一之瀬さんはすごいですよ。

田頭 え。

日比野 今、風俗の面接の合格率ってどれくらいかご存知ですか。

鈴木 日比野先生？！

日比野 3割くらいらしいですよ。私たちの世代だと、他に行き場がなくなった人の最後の駆け込み寺ってイメージでしたけど、今は、抜群に可愛くて、よく気が付いて、コミュニケーション能力もあって……どこに行っても活躍できるような人じゃないと残れない、大企業よりも入るのが難しい仕事らしいです。一之瀬さんが、あの年齢で続けられてるってことは、相当すごいことだと思いますよ。

鈴木 先生、日比野先生、どうしたんです。みなさんびつくりされてるじゃないですか……（保護者たちに向かって）すみません、突然……。

日比野 大工も、将来有望ですよ。一時期は3Kだなんて言われて、目指す人も少なくなってきましたが、その分、今は、技術のある大工さんは引く手数あまたです。震災の復興需要、東京オリンピックと続いて、ゼネコンも住宅メーカーも、大工さんの取り合いですよ。そこの大企業よりも稼いでる棟梁さんはたくさんいます。

近藤 そうなんですネ。

日比野 会計士……は、どうなんでしょうね。コンピューターの性能も上がって、昔は人

間が大量の時間を掛けてやってた仕事を、数千円のソフトでできるようになりました。会計とか法律とか、資格に守られた仕事は、そのうち、人工知能に置き換わっちゃうだろうって言われてます。麗羅ちゃんが大人になる頃には、会計士なんて誰も目指さないかもしれないですよ。

田頭
・・・。

日比野
世の中、どんどん変わってるんですね。最近、読んだんですが、アメリカの学者が、何年前かにニューヨークタイムズに出した記事が話題になってましてね。今の小学生の65%は、社会に出る時、今まだ存在していない職業に就くって・・・そんな子供たちに、私たちがいたい、何を教えられるんでしょうね。

仙波
コンビニはどうなるんですか。

日比野
どうでしょう・・・分かりません。でも、残ってたとしても、今、私たちが知ってるコンビニとは、全然違う存在になってるでしょうね。

仙波
・・・確かに、私が子供の頃、コンビニなんてほとんどなかったもんな・・・。

鈴木
日比野先生がおっしゃることは、もつともですが、どんなに世の中が変わったとしても、決して変わらない・・・なんというか、人間としての基礎の部分があります。本来であれば、我々がその・・・ゆるがない価値観を持っていなければならなかったんですが、今回は、我々も、目先のものに流されてしまったといいますが・・・そこは反省しなければならぬと・・・。

奥村
あるんですかね、そんなもの・・・わたしもう、なんか、何にも分からなくなっちゃった。

間

御手洗
あの・・・確かに、みなさんがご心配されるのは、よく分かります。残念ながら、高学年ぐらいから、非行に走るお子さんは・・・いらっしやいます。喫煙、暴力、中には、小学生で売春なんて話も・・・。

鈴木
先生？！

御手洗
非行のきっかけは、人間関係です。友達や先輩に誘われて、なんとなく付き合っているうちにどんどん悪い方に流されていく。それは心配ですよ。だから・・・もし不安に思われるようだったら、お子さんに言って頂いてもいいです・・・『一之瀬七海ちゃんとは遊んじゃ駄目』って。

奥村
・・・御手洗先生？

鈴木
先生、なんてことを・・・正気ですか！？

御手洗
でも・・・お子さんを救うのも、やっぱり人間関係なんです。どんなに家庭環境がひどくても、ひとり大事な友達がいれば、大丈夫なんです。イジメられても、分かってくれる親が、先生がひとりいればいいんです。

奥村
先生、一体・・・。

御手洗
・・・だから私は・・・みなさんに対抗して、みなさんのお子さんと、七海ちゃんが仲良くなるように全力で取り組みます。七海ちゃんがみんなの人気者になれるように、七海ちゃんの良いところをいっぱい見つけますだから・・・。

鈴木 御手洗先生。いい加減にきなさい。どれだけ保護者の皆様にご迷惑をお掛けすれば気が済むんです。

御手洗 ・・・・だからです。・・・私が至らなくて、学校を・・・子供たちを信じてもらえなくなっただけです。今、私がここで何を約束しても、きれいごとにしかなりません。・・・だったら、あとは・・・自分で結果を出すしかないじゃないですか。

鈴木 理屈を言うな。さっきからの失礼な発言。いったい何のつもりだ。・・・(保護者に向かつて)先ほどから重ね重ね・・・大変申し訳ありません。御手洗はちよつと感情的になっておるようですから、ちよつと退席させます。

御手洗 先生。

鈴木 このたびの数々の不始末については・・・改めて、どのような形で処分をするか、ご報告させて頂きます。その上で・・・。

日比野 御手洗先生だけがしよいこまなくていいんじゃないですかね。私も同じ4年生の担任として、学校の中で、誰かイジメられてないか、非行に走ったりしないか、きちんと目を配って、ひとりひとり・・・麗羅ちゃんも、七海ちゃんも、守っていきます。いろいろと不手際もあり、ご迷惑をお掛けして本当に申し訳ありませんが、引き続きご支援よろしくお願い致します。

鈴木 日比野先生・・・。

田頭 ・・・・(御手洗に向かつて)まるで、こつちが悪者みたいな言い方ですね。

御手洗 いえ・・・決してそういうつもりは。

田頭 口では何とでも言えますよ、でも・・・。

美樹 あの、私もやります。

田頭 ・・・・美樹ちゃん?!

美樹 すみません、私が言っても、ぜんぜん説得力ないの分かってるんですけど・・・本当、私なんて、全然、先生に向いてないってよく分かりました・・・でも、それでも先生になりたいんで・・・なるんで、ミニバスの時、ちゃんと麗羅とお話して、そんな、変な風にならないように、ちゃんと見守っていきますので。そんな・・・心配しないでください。

田頭 ・・・・。

間

徳永 ・・・・そうですね。先生方と、ボランティアの方・・・そしてもちろん、私たち保護者が一体となって・・・子供たちを育てていきましょう。

間

鈴木 ・・・・えーあの・・・そうですね。保護者のみなさまがおっしゃるといふことでしたら・・・。

田頭 ・・・・私も・・・私たち保護者も、負けないように頑張りますので・・・お願いします。私たちの子供たちを。

御手洗
・・・・
鈴木
・・・わかりました。

間

仙波 あの、課外授業の件なんですけど・・・。
日比野
・・・あ、はい。

仙波 やっぱ、私、話しましょうか。
奥村
え。

仙波 いや・・・その、立派な志みたいなのがあるわけじゃないですけど。ほら、さっき世の中変わるって言ってたじゃないですか・・・ただね、逆に、どんどん変わって、消えていくなら、ちゃんと今やってること、伝えとこうかなと思って。

奥村 どうしたの、急に

仙波 (手に持った卒業文集を眺める)ダイエー目指してたって、今から考えると笑えますけどね、なくなってるじゃん！って。あ、一応まだあるのか。でもね、その時のオヤジの熱い感じはなんか、記憶に残ってて・・・いや、本当に先生の言う通り、10年後には世の中からコンビニなくなってる、オヤジなにやってたんだろうってなつたとしてもね。なんか、今、この瞬間の私のあがき？みたいなものは、話してもいいんじゃないかなって。

近藤 いいじゃないですか？仙波さんに話してもらいましょよ。
徳永 そうですね。お願いしましょうか。

仙波 あ、あんまハードル、上げないでください。ただでさえ、プレッシャーなんですから、だって子供たちみんなキャバジョー期待してるんですよ。帰れこのオヤジ、とか言われませんかね。

奥村 言われるだろうね、それは。

仙波
・・・じゃ、やっぱ、一之瀬さんの方が。

奥村 キャバジョーよりコンビニの方が格好良いって言ってやりな。そうじゃないと、一之瀬さんが、納得しないよ。

仙波 ハハ、そんな・・・。

奥村
・・・ソープ嬢が、一位になる時代は、きますかね。

日比野 どうでしょう・・・もしかしたら。

奥村
・・・一之瀬さんには、それまで待ってもらおうからさ、

日比野 えーと、仙波さん、よろしいですか？

仙波
・・・分かりました。ちゃんと話、しますよ。

奥村
お願いします。

全員、少しほっとしたような空気。

近藤 あのと、ところでもうこんな時間になっちゃいましたけど。どうします？

日比野 あ・・・そうですね・・・結局、課外授業の話しかしてませんが・・・。今日は

ったん、ここでお開きにしますか。

美樹 続けましょう。記念式のこと、今日決めてしまわないと。

日比野 え。

美樹 私、もうすぐ教育実習でいないんですから、今日のうちに、やっちゃいましょう。

近藤 何、さっきから、やる気じゃない。

美樹 無理やり元気出してんです。みなさんのパワーに負けないように・・・カラ元気で
す。

奥村 頼もしいじゃない。じゃ(資料を渡す)日比野先生の代わりに、進行お願いしちゃ
いますようか？先生になった時の予行演習ってことで。

美樹 分かりました。それではみなさん、はじめますよ。

徳永 頑張って。

美樹 ハイ！

会議が始まる。

ゆっくりと暗転。

終